

第4節 出土遺物から見る遺跡の様相

調査成果を土器、石器、金属器の様相について以下にまとめる。

1 土器の様相

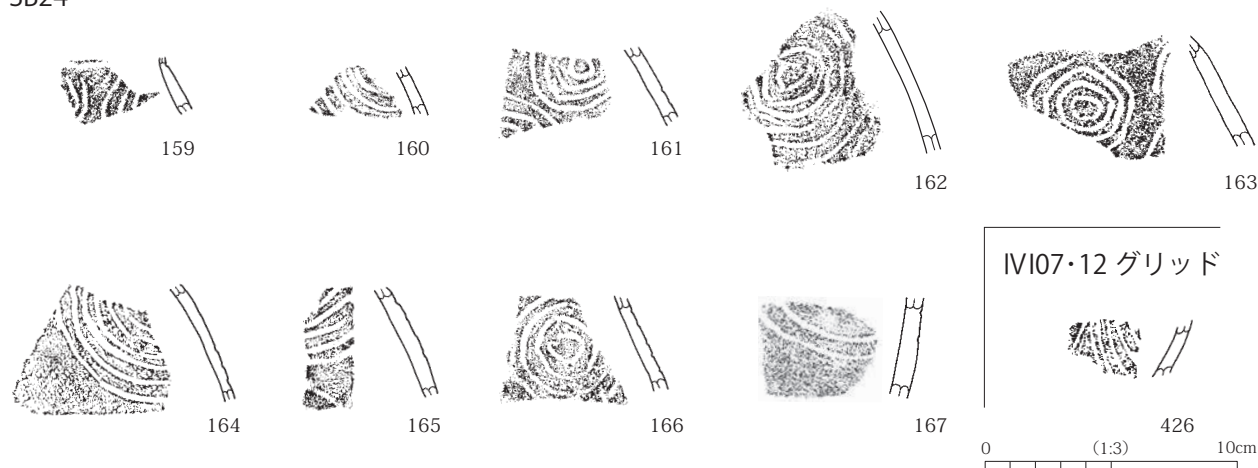
出土した土器は弥生時代中期後半から後期前半のものが主体となり、縄文時代前期、中期、後期と古墳時代前期のものがわずかに確認された。弥生時代の土器は在地の栗林式と吉田式土器が大半を占めるが、若干の外来系土器も認められる。栗林式土器では、栗林2式新段階のものが主体となり、栗林1式、2式古段階、3式が少数存在する、という様相が指摘できる。

(1) 外来系の要素を持つ土器

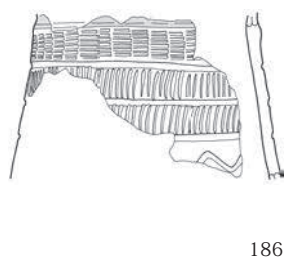
出土した土器の大半は在地系の土器と判断できるが、栗林2式新段階と吉田式の土器と共伴して、外来系の要素を持つ土器が出土した。少数ではあるが、以下に取り上げる。

第116図の159～167・426は同心円文または渦文をもつ東北地方南部の川原町口式類似の壺形土器の破片である。同心円文の壺形土器は10片出土し、9点(159～167)がSB24、1点(426)はⅣⅠ-07・12グリッドの遺物包含層から出土した。他に同種の土器は認められず、ほとんどがSB24から出土しており、同一個体の破片と思われるものもある。ただし、ⅣⅠ-07・12グリッドはSB24と約40m離れており、両者を一括資料とはできない。

SB24



SB25



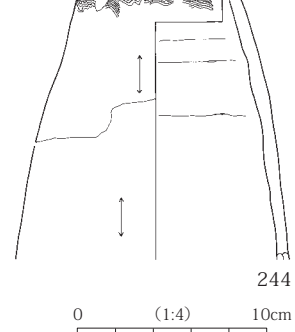
186

SB23



137

SB27



244

第116図 南大原遺跡出土の外来系土器

川原町口式土器は、千曲川流域の長野市松原遺跡、佐久市西一本柳遺跡（佐久市教委 2008）で確認されているが、長野県内では類例が少なく、新潟県や北関東地方で出土事例が複数報告されている。東北系土器との関連については、後期前半の天王山式土器と合わせて、弥生時代中期終末～後期前半の東北系文化の南下現象が長野県域にも及んでいた可能性を千野浩がすでに指摘している（長野市教委 2001）。本遺跡出土の同心円文土器は、東北地方南部に川原町口式土器そのものではないが、その影響で成立した土器であると考えられ、北陸地方もしくは北関東地方との関連を示唆する。

第 116 図 186 は口縁部から頸部上位に赤彩が想定され、頸部に横走沈線、櫛描簾状文、押引き状の 2 段の刺突列、波状沈線文が施文された壺形土器であり、SB25 から出土した。SB25 からは栗林式 2 式古段階から新段階の土器が出土しており、当該土器は栗林 2 式併行の土器と想定される。当該土器に見られる櫛描簾状文、刺突文は栗林式土器には認められない文様要素であり、胎土が栗林式土器に比べ白色を呈することから、他地域から持ち込まれた可能性がある。今のところ類例を確認できず、何処から持ち込まれたものか想定をすることができない。前述の同心円文土器と合わせて、中期後半の外來系土器である。

後期前半吉田式の時期では、第 116 図 137・244 は吉田式とは異なる特徴を示す。137 は SB23 から出土、244 は SB27 から出土した。137 の文様は吉田式のものであるが、口縁部に屈曲を持ち横帯口縁となる器形は吉田式には一般的ではない。また、焼成が他の甕形土器に比べ硬く焼かれているようで、本遺跡出土の吉田式の甕形土器とは異なる。244 は壺形土器である。胎土、焼成は吉田式と共通する。頸部のみに櫛描波状文が施文され、胴部は無文で縦ミガキの調整も吉田式の壺形土器に通有されるが、胴部が非常に細身な器形は、吉田式には見られない要素である。

以上、外來の要素が認められる土器の具体的な供給源を追及することはできなかったが、今後の研究の進展に期待したい。

（2）植物花序による施文のある土器

4 次調査でオオバコ等の植物の花序による疑似縄文および刺突文の存在を指摘した。今回の調査でも植物の花序を原体とした施文が確認された。文様の遺存状況により明確に判断できないものも含むが、SB18・SB20・SB24・SB25・SQ07・SM16・SD06 等の遺構から花序による疑似縄文・刺突文が確認された（第 72～89 図 59・65・72・102・174・178・185・358・395・412・423）。数は少ないが、一定量出土している。花序による疑似縄文および刺突文について、4 次調査で指摘した佐久市森平遺跡、長野市南曾峯遺跡・松原遺跡、中野市栗林遺跡・琵琶島遺跡等複数の遺跡から出土しており（長野県埋文 2000・2012・2014・2016）、千曲川流域で一定量存在すると予想される。花序による施文が外來の要素であるのか、在地由来なものであるのか、今のところ判断できないが、今後検討していく課題としておきたい。

2 石器の様相

4 次調査の発掘調査報告書では、小型剥片石器の製作について、栗林 1 式では認められるが、栗林 2 式以降では認められないことを指摘した。

今回の調査では、SB21、SB27、SB29 の堅穴建物跡から石器製作に関わると考えられる剥片が比較的まとまって出土した。このうち、SB21（栗林 2 式新段階）と SB29（栗林 1 式から 2 式古段階）で小型剥片石器の製作が行われていた可能性が高い。SB21 では、チャートを主体とした 23 点の剥片・碎片が出土しており、チャート製の楔形石器、微細な剥離がある剥片が出土している。このことから、4 次調査の見解を修正して、栗林 2 式のある段階までは小型剥片石器の製作が行われたと考えられる。

また、後期前半の SB27 からは磨製石鏃の石材である緑泥片岩の剥片と共に、磨製石鏃未製品と砥石などが確認されていて、磨製石鏃等の石器製作に関わる遺構であると判断した。

SB23、SB24、SB25（SB14）からは台石と敲石がセットで出土している。石器組成から、これらの竪穴建物跡で剥片石器製作は行われていないと考えられる。敲石や台石の表面には楔が当たったような線状の敲打痕が認められるものがあり、例えば鉄器加工等の石器製作以外の用途で使用されていたと想定する。

3 金属製品等の様相

弥生時代の金属製品は鉄製品2点、小鉄片6点である。時期別には中期後半の鉄製品が1点、小鉄片が4点、後期前半期が同1点、2点である。鉄製品2点はいずれも当初は鉄鏃と想定したが、X線透過撮影とX線CT検査の分析から、小型の刀子等の未製品であろう。4次調査では鉄斧1点（中期後半）、鉄鏃3点（中期後半1、後期前半2）が報告されている。今回、鉄斧について、参考資料としてX線CT検査を行ったところ、刃部等の形状から「鉄鑿」であると判断された（第4章第3節1参照）。4・5次調査の結果、中期後半期から後期前半を通じて集落の竪穴建物内から鉄製品と共に、小鉄片が出土した。これらは鉄器の加工時に切断された残片である可能性があり、集落内での鉄器加工の様相を具体的に示す資料として重要である。

金属製品ではないが、4次調査で鍛冶炉に用いるファイゴの関連資料である可能性が指摘されている焼成粘土塊が竪穴建物跡SB19、SB23、SB25（SB14）、SB27、SB29から出土している。また、被熱で赤色化したと考えられる礫がSB19（21点）、SB20（5点）、SB23（12点）、SB25（SB14）（4点）、SB27（14点）、SB29（4点）等から出土している。基盤層は砂泥基質であって、当遺跡内出土の礫はすべて人為的に持ち込まれたものといえる。礫の被熱原因は不明であるが、竪穴建物内での鉄器加工等の作業に関わる資料の可能性を考慮したい。

引用文献

佐久市教育委員会 2008『岩村田遺跡群西一本柳遺跡 XVI』佐久市埋蔵文化財調査報告書 160 集

長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5 松原遺跡 弥生・総論 3 弥生中期・土器本文』
長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36

長野県埋蔵文化財センター 2012『北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 6 南曾峯遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 93

長野県埋蔵文化財センター 2014『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107

長野県埋蔵文化財センター 2016『一般県道豊田中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 琵琶島遺跡・壁田城跡・ねごや遺跡』
長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 112

長野市教育委員会 2001『長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ』